Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-05-31

企画紹介〔2024年度夏公開研究会 現代人の生と時間〕（活動報告）

梅村，麦生
高橋，顕也

(Citation)
綜合文化,1:162-164

(Issue Date)
2025-03-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/0100496711

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/0100496711

〔2024年度夏公開研究会　現代人の生と時間〕

企画紹介

梅　村　麦　生
（UMEMURA Mugio）
高　橋　顕　也
（TAKAHASHI Akinari）

2024年8月30日（金）、台風10号の接近により、開催形態は対面からオンラインに急遽変更となったものの、神戸大学異分野共創研究ユニット「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」と「社会の時間」研究会の共催で、2024年度夏公開研究会「現代人の生と時間」が開催された。以下では、その研究会の概要と、3人の専門家による各研究報告の要旨を紹介する。

神戸大学異分野共創研究ユニット「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」では、「異なる文化」のあいだ、そして「一つの文化」と思われてきた文化の内部にも変容をもたらすような「文化交渉」の過程に注目し、さまざまな分野から研究を重ねてきた［参照、梅村・梶尾・佐々木2024］。

そうした「文化交渉」の過程のなかで、今回の公開研究会で特に取り上げたのは、「時間」という契機である。現代社会に生きる諸個人は、過去の時代の時間意識や時間経験からの変化による影響を、否応なしに被っている。もとより、社会学の時間研究では、近代社会の成立とともに、時計時間とカレンダーの統一化が進められ、それに基づく時間規律の浸透やライフコースの画一化などと相俟って、単一の抽象的な時間概念、あるいは「直線的」な時間意識が志向されたと言われてきた。それに対して現代に近づくにつれて、社会のさまざまな領域の細分化や多様化、デジタル技術の発展、あるいはライフコースの個人化などにしたがって、時間意識や時間経験もまた多元化し、旧来の時間概念や時間意識とのコンフリクトや、個人どうし、あるいは一人の個人のなかでも、時間的な葛藤が生じるに至っている、と指摘されている［参照、伊藤2024；梅村2024］。まさしく「時間」をめぐる文化変容を経験しているのが、いまを生きる現代の人びとである。そしてこのテーマにこれまで取り組んできたのが、本稿執筆者の梅村と高橋らが共同で立ち上げた「社会の時間」研究会である［参照、「社会の時間」研究会2020］。

そこで本公開研究会では、「現代人の生と時間」に対して多角的にアプローチするため、現象学（哲学）、生活時間研究（家族社会学）、メディア研究（文化社会学）という、専門領域が異なる3人の専門家による研究報告と討論をおこなった。また当日の司会は、梅村が担当した。

まず、第一報告の柳川耕平（立命館大学）「生を律する時間――フッサール現象学の視座から」では、柳川によるエトムント・フッサールの現象学と時間論の研究に基づき、内的知覚によって形成される時間形式について検討を加えたうえで、私たちの日々の生活のなかに一定のリズムをもたらすものとして、「空腹」の意識について提起がおこなわれた。

次に、第二報告の齋藤早苗（お茶の水女子大学）「時間論とワーク・ライフ・バランス研究を接続する」では、齋藤がこれまで従事してきた男性の育児休業の取得を阻む「職場の雰囲気」に焦点をあてた分析を踏まえて、時間意識の葛藤と変容に注目し、社会学的時間論とワーク・ライフ・バランス研究との接続について、提起がおこなわれた。

最後に、第三報告の真鍋公希（中京大学）「後期近代的な時間意識としての『タイパ』――メディア利用行動との関連を中心に」は、若年層への「タイパ」意識の普及と社会的加速理論による議論を背景として、2024年8月に実施されたアンケート調査の結果に基づき、古典的近代（H. ローザ）から共通する時短や効率化を求める時間意識と、後期近代的な柔軟な時間管理への志向との併存という結論が提示された。

各報告の概要は、次頁以降の報告者による要旨に当たられたい。そして以上の三報告を踏まえて、討論者を務めた高橋と鳥越信吾（昭和女子大学）によるコメントがあった。

まず高橋から以下のようなコメントがあった。三報告とも、抽象的なままに留まりがちな（哲学的／社会学的）時間論と具体的な事例との結びつきを試みていて大変興味深い。三者三様の内容だが、生きられる時間としての「主体の時間」と合理的な時間としての「社会の時間」という時間の2つの水準（の関係）をいずれの報告も扱っているという共通点をとりだすことができる。主体の時間には、「生を律する時間」や「欲求のリズム」（柳川報告）、「家族の時間」や「〈仕事も育児も〉の時間意識」（齋藤報告）、「生活テンポの加速」（真鍋報告およびローザ）等が、「社会の時間」には、「ファストフード」や「シフト制」（柳川）、「制度の時間」や「〈仕事優先〉の時間意識」（齋藤）、「技術的加速」や「社会変動の加速」（真鍋、ローザ）等が含まれると整理できるだろう。

そしてこの二分法に基づいて高橋から、「社会の時間」が「主体の時間」をつくりだしている側面もあるのではないかという共通の論点が提出された。柳川報告へは、技術的または社会的環境が新種の欲求を生み出し、生のリズムを律することがあるのではないかという問いが投げかけられた。齋藤報告へは、〈仕事も育児も〉の時間意識の背景に、多様な時間資源を個人で管理せよという現代社会からの要求があり、この時間の自由化＝個人化から生じる時間資源の格差が、個人の選択の名の下に正当化されるリスクがあるのではないかという疑問が提示された。真鍋報告へは、若年層に特に顕著に見られる時間管理「積極群」がもつ時間意識の高さ（柔軟性、確実性、可能性への志向と行動）には、どのような社会的背景が想定されるのかという論点が挙げられ、情報環境における体験や時間操作の増大（＝技術的加速）が時間資源の管理意識を介して生活テンポの加速を誘発している可能性が指摘された。

次に鳥越からは、時間意識（例えば、時間を直線的なものとして表象するか、あるいは円環的なものとして表象するか）と時間規範（あるいは時間の使い方の規範）の違いについて指摘があったうえで、柳川報告に対しては、空腹がもたらすリズムの均質性と不均質性、フッサールの内的時間意識論と時間生物学的なサーカディアンリズム（概日リズム）との連関の可能性について、齋藤報告に対しては、意識的に時間配分をおこなおうとする感覚が社会化の過程のなかで身につく以前の子供において、どのような時間意識がありうるのか、そして男性の視点から見た、新たな〈育児も仕事も〉の時間意識と、これまで主に女性に求められてきた〈育児優先〉の時間意識との葛藤をどのように描きうるのかについて、最後に真鍋報告に対しては、現代の若年層の「タイパ」志向に見られる、真鍋の言う「不確実性の回避」意識についても、むしろ古典的近代の時間意識としての「タイムイズマネー」の感覚が頑強に残存しているのではないかという点について、コメントがあった。

以上の討論者によるコメントを受けた報告者によるリプライの一部は、後掲の報告要旨の末尾に記載されている。要旨と併せて一読されたい。

なお、本公開研究会の実施にあたっては、神戸大学学術研究推進機構異分野共創研究企画による研究助成と、日本学術振興会科学研究費助成事業・基盤研究 (C)「社会学的時間批判―公理論化と学説・応用研究の総合による現代的時間現象の批判的研究」

（課題番号：JP22K01917、研究代表者：高橋顕也、研究期間：2022 年度～ 2024 年度）による支援を受けている。ご登壇いただいた各氏を始めとして、研究会の開催にご協力いただいた関係各位ならびに当日ご参加いただいた方々には、あらためてここに記してお礼を申し上げる。

文献

伊藤美登里，2024，『デジタル社会と時間』学文社.

「社会の時間」研究会，2020，「特集紹介――『時間の社会学』の現代的展開」『社会学雑誌』37: 75-80，（2024 年 10 月 8 日最終閲覧，https://doi.org/10.24546/E0042279.）

梅村麦生，2024，「『時間の社会学』と社会学的時間批判――第 96 回日本社会学会大会テーマセッション報告を中心に」『メディア・コミュニケーション』74: 9-18，（2024 年 10 月 9日最終閲覧， https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1121824X-20240300-0009.）

梅村麦生・梶尾文武・佐々木祐，2024，「異分野共創研究ユニット「『文化交渉学』創出にむけた研究ユニット」――プロジェクト紹介と活動報告（2023 年度）」『海港都市研究』19: 65-70，（2024 年 10 月 8 日最終閲覧，https://doi.org/10.24546/0100488382.）

梅村麦生（神戸大学大学院人文学研究科）
高橋顕也（立命館大学産業社会学部）